

近現代歴史学習における地域の人物の教材開発

一 「若槻礼次郎」と「福田平治」の教材化と授業実践を通して一

島根大学大学院教育学研究科 岩田 遵子
島根大学教育学部 森本 直人

I はじめに

新学習指導要領では、歴史的分野の改訂の一つとして近現代の学習の重視を打ち出している。しかし、県の学力調査結果分析からは子どもたちの近現代の理解の低さが指摘されている。この時代の学習は苦手意識をもたれやすいが、それは近現代史学習が社会の仕組みの学習中心となり、背景となる経済状況等の理解が重視されるので、興味をもちにくいことが原因の一つと考えられる。この状況の改善を図るため、人物学習を一つの手がかりとして考えてみたい。人物学習は、その有効性について従来から認められる一方で、その問題性も指摘されており、それを克服するための提案もなされてきた。これらの知見を手がかりとしながら、本研究は、近現代の歴史学習に地域の人物を教材化して取り入れることにより、この時代に対する子どもの学習意欲を高めるとともに、人物の生き方を通して歴史的背景や社会の仕組みを考察し合う授業を開発することを試みた。

II 地域に縁のある人物の教材化

1. 人物の選定と単元の位置づけ

本研究では人物の教材化にあたり次の観点から「若槻礼次郎」「福田平治」の2人を選んだ。

- ・地域に縁のある人物を取り上げることで、人物の行為や生き方に共感したり疑問をもったりして、学習内容を身近に感じることができる。
- ・人物の願いや生き様がわかる資料（自伝など）や人物をとりまく人々の思いや願いがわかる資料が入手できる。
- ・人物の生き方を追究する中で、人物が直面した時代状況や世の中の仕組みが見えやすい。

若槻礼次郎は、1866年松江藩下級武士の家に二男として生まれた。貧しい中で借金をしてまでも司法省法学校（現在の東大法学部）に学び、帝国大学法科を首席で卒業し大蔵省の官僚になった。主税局長、次官を歴任した後、貴族院勅選議員、大正初期に2度大蔵大臣を務めた後、大正末期に加藤内閣で内務大臣となり、普通選挙法と治安維持法の成立に尽力した。加藤首相の急死の後、第25代総理大臣となる。昭和恐慌後の財政の立て直しに努力するも政策的に枢密院と対立し1年余で総辞職した。枢密院との対立は若槻の穏健外交が原因とされている。ロンドン軍縮会議全権を務め、「骸骨が大砲を引っ張っても仕方がない」と、国力と調和した軍備を訴えている。昭和6年に第28代総理大臣となるが、在任中に勃発した満州事変の不拡大路線政策が国民・軍部に支持されず8ヶ月で総辞職した。その後、重臣会議の一員として軍部に抵抗し、東条英機の首相任命に反対したり、太平洋戦争末期には終戦工作に関与した。その穏健な政治姿勢は、東京裁判の首席検事を務めたジョセフ・キーンナンから、「日本における真の平和愛好者」と称えられている。¹⁾

福田平治は、若槻と同年の1866年、鳥取市の裕福な商家の長男として生まれた。1879年家業である

印刷所を松江に開くため祖父母とともに松江に移るが、同年に祖父、翌年に父を亡くし13歳にして家業の印刷所を引き継ぐ。病床の父を見舞う途上、年老いた盲人との悔悟の念残る「出会い」が後に平治を福祉事業へと向かわせる原体験となる。1893年松江を水害が襲い多くの孤児が出たため、その救済を県や市に働きかけるも行政を動かすことはできなかった。1896（明治29）年、慈悲深い祖母の死に際して、祖母の供養のため印刷業の傍ら、県下初となる児童福祉施設「松江育児院」を殿町で開設した。1904年には、児童福祉事業に専念するため印刷所を売却し、北田町へ育児院を新築移転する（現在は「愛隣館」として一部保存）。1905（明治38）年には、妹与志たちと協力し「松江私立盲啞学校」（現在の県立盲学校、県立松江ろう学校）を設立。その後、鳥取に育児院分院を開設したり、老人ホームや無料宿泊所、共同風呂など社会福祉事業を広げた。1933（昭和8）年松江市議会議員に当選。1934年京都に愛隣託児園開設。1936年松江育児院を引退し京都へ移る。1941（昭和16）年京都愛隣託児院で没。1942年、遺言により遺体を骨格標本とし、松江盲啞学校へ鍼灸教育の教材とするため寄贈した。2)

近現代の歴史においては人物の評価が定まっていないこともあり、人物学習のやりにくさがある。特に、政治家は客観的な評価が困難な状況で、学習での扱いが難しい。しかし、大正初期から太平洋戦争終戦まで政治の中枢に関わり続けた若槻礼次郎は、軍縮と平和を追求し続けた生き方から、軍拡と戦争遂行へと向かう軍部や国民世論と対峙せざるを得なかった。軍部や国民世論との対比において若槻の決断や苦悩を理解することで、当時の世の中の状況や仕組みが見えやすいため教材化する意味が大きく、「十五年戦争」を主題とした通史の中で扱う教材として適している。

一方、若槻と同時代を生きた福田平治は、松江の児童福祉・障がい者福祉への貢献など地方で功績を残しているが、子どもたちにはほぼ無名の存在である。地域出身の著名な大政治家である若槻と対照的なところがあり、二人を教材化し実践を比較して人物学習の要点を考察することもできる。福田は、福祉事業に関する貢献を中心とする業績故に、歴史学習を終えた後に発展的な単元設定をし、福祉という視点で歴史を振り返らせ、歴史学習の学び直しとともに「新しい公共」創出を課題とする公民的分野の学習につなぐ意味で良い教材になるであろう。

2. 授業づくりの工夫

① 人物学習に関する先行研究から

戦前から多くの人物が歴史学習において取り上げられており、その人物や取り上げ方は時代によって異なる。大正10年に「日本史」から「国史」に名称が変更されてからは、人物のエピソードや生き方を通して道徳的教訓を子どもに植え付けることが特に重視され、軍国主義教育に利用されることも多かった。戦後の歴史教育改革において批判・軽視されていた人物学習は、昭和30年代の教育保守化の動向と相まって、再び注目されるようになった。その後学習指導要領における人物学習の比重は次第に重くなり、平成元年度の改訂では具体的な人物名が例として示されるに至り（小学校）、平成20年度の改訂でも引き継がれている。

このような経緯を考えると、人物学習を行うに当たっては、授業者がその有効性ととも問題性について認識した上で、問題点を克服するための手立てをとって授業構成をすることが大事なことだと

考える。藤岡は、1983年にそれまでの研究の論点から、人物学習の問題点として次の3点を指摘している。

- ・人物を取り上げることが、ややもすると歴史教育を道徳教育にかえてしまいかねない。
- ・偉人や英雄が歴史の創造者であるとみられる英雄史観を教えることになりやすい。
- ・人物を取り上げると、子どもは人物への「好き・きらい」で反応してしまい、客観的な人物学習にならない。

加えて、「十全な形で展開される人物学習の五つの側面」を示している。3)

現行の学習指導要領のもとでは、主体性の形成と教えたい価値に到達するための妥当性から、人物の願いや生き方を追体験して歴史認識を深める「理解型社会科」の授業が多く行われている。藤岡は、人物学習を有効な教授方法だとしながらも、科学性を強調し、主観的に「共感」させることは入口であり、最終的に「分析」することが大事であるとして「理解型社会科」を批判している。それに対し、森本は歴史認識の主体性を尊重し、科学性のために主観を排除する藤岡らの論理で育つものは、借り物の主体性に過ぎないと主張する。そして危惧される「価値注入」という問題は、「解釈学的循環」や「対象の複線化」により解決されるとした。そして、加藤公明の「討論学習」を評価し、この方法を「理解型社会科」の問題を克服する上で有効であるとしている。ただし、討論は発達段階を考慮した時に中学生には少し難しく、高校生段階に適切であろうと述べている。4)

このようなことから、中学校段階の人物学習の問題点の改善の手立てとして、授業の展開に次の2点を取り入れることにした。

- ・理解の対象を複線化することで、対峙点の背後にある社会の状況、仕組みに迫る。
- ・討論に準じて、解釈学的循環に近づけるような「話し合い」場面を設定する。

② 授業展開と資料づくりの工夫

右のように授業を組み立て、各段階の中核に「話し合い」場面を設定するとともに、「話し合い」を促進する資料づくりにも重点を置いた。子どもの心に働きかけ、親近感や好奇心を呼び起こし考えさせることができる読み物資料や視覚資料の作成に努め、事実として当時の状況を理解できるような視聴覚資料や新聞記事を探して活用した。

<授業の主な段階>

*は「話し合い」場面を設定する

○人物との出会い

- ・人物の生い立ちや業績を知る
→願いや思いに迫る(共感)*
- ・問題解決や意志決定場面(選択場面)の追体験→疑問・自分なりの考え

○背景や仕組みの考察

- ・時代背景や世の中の仕組みを考察する*
→異なる対象を(理解の対象の複線化)
→同時代的視点で

○見方・考え方の深化

- ・人物の生き方から今とこれからを考える*

3. 若槻礼次郎の教材化

① 単元名 「若槻礼次郎の生き方から戦争と平和について考えよう」

② 単元の位置づけ

終戦までの学習をした後で設定し、近代の歴史を振り返るとともに、戦後の歴史学習や公民の学習(平和主義、政治)につなげる。

③ 指導計画（3時間構成）

第1時 若槻礼次郎はどのように政治家になり、どんな活躍をしたのだろうか

第2時 若槻礼次郎はなぜ国民の支持を得られなかったのだろうか

第3時 若槻礼次郎の生き方と戦争、平和について話し合おう

④ 単元目標と展開

単元目標	<ul style="list-style-type: none"> 紙芝居や視聴覚資料，読み物資料を活用して礼次郎と出合わせ，人物を身近に感じさせて学習への意欲を高める。 礼次郎の生き方や願い，苦悩に共感させながら，なぜ国民に支持されなかったのかに疑問を持たせ，当時の世の中を多角的に考察させる。 なぜ戦争に向かってしまったのか，戦争を防ぐためにはどうしたらよいのかを，自分なりに考えさせ，話し合いを通して，考えを広げたり深めたりさせる。 		
過程	学習場面・主な問い	教師の支援と指導上の留意点	資料等（*自作）
<p>第一時</p> <p>人物との出会いの段階</p>	<p>1 写真を見てどんな人が想像する。</p> <p>2 紙芝居を視聴して，礼次郎がどのように政治家になったのかを知る。</p> <p>3 政治家になってからの業績について年表で確認する。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">礼次郎はどんな活躍をしたのだろうか</p> <p>4 ロンドン会議や2度目の総理大臣になった時の礼次郎に関する新聞記事から，当時の国民の受け止め方を考える。</p> <p>5 礼次郎が大切にしていた思いは何か，話し合う。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">礼次郎が大切にしていたことはどんなことだろうか</p> <p>6 学習を振り返り，自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 礼次郎の写真を提示しどんな人物か想像させる。 子どもの頃の礼次郎を視覚資料で提示することにより，礼次郎の一生に親近感を持たせる。 年表中の業績に線を引かせ，2回総理大臣になったことや，ロンドン会議の全権として海軍軍縮条約に成功したことに着目させる。 海軍軍縮条約の調印が世論に歓迎されていることに気づかせる。 期待されて総理大臣になり，松江の人々は大変喜んだことに気づかせる。 ワークシートに自分の考えを書かせ，それをもとにグループで話し合わせる（ホワイトボード）。 ロンドン会議やその後の発言より，礼次郎が国民の負担を減らし，国際協調の政治を進めようとしたことに気づかせる。 	<p>礼次郎の写真</p> <p>* 紙芝居</p> <p>*年表「若槻礼次郎の生涯と世の中の動き」 当時の新聞記事</p> <p>*回廊録や雑賀小での講話の抜粋（ワークシート①）</p> <p>振り返りカード</p>
<p>第二時</p> <p>背景や仕組みの考察の段階</p>	<p>1 前時の学習を思い起こす。</p> <p>2 礼次郎が総理大臣になった頃は，どんな世の中だったかを確認して整理する。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">礼次郎が総理大臣になった頃は，どんな時代だったのだろうか</p> <p>3 満州事変から総辞職に追い込まれた経緯と，その後の動きをつかませ。</p> <p>4 礼次郎が国民の支持を得られなかった理由を話し合う。その際に考えた理由の根拠になるもの（事実や資料など）を示せるようにする。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">国民はなぜ，礼次郎を支持せず軍部を支持したのだろうか</p>	<ul style="list-style-type: none"> 礼次郎が国際協調を大事にしたことを思い起こさせる 礼次郎が総理大臣になった時に満州事変が起こり，15年戦争の始まりになったことを押さえる。 昭和初期の様子をDVDを視聴してつかませる。 <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">国内での経済の混乱と貧困，軍国主義の高まり，満州事変の勃発と満州国の設立，満州への移民</p> <ul style="list-style-type: none"> 読み物資料を読んで，礼次郎の思いと逆に軍部が動き，国民もそれを支持したことをつかませ，苦悩する礼次郎の姿を浮き彫りにする。 同時代の視座で考えさせる。 根拠を挙げて考え話し合わせる（ホワイトボード）。 話し合いがうまくいかないグループには，下の考えるヒントを示す。 <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">経済状況は？ 満州事変の情報は何？ 日清・日露戦争後の人々の考えは？ 中国・朝鮮の人々への見方は？ 政治の仕組みは？</p>	<p>*年表「若槻礼次郎の生涯と世の中の動き」 DVD「昭和初期の日本」</p> <p>*読み物資料「若槻礼次郎の苦悩と平和への願い（一）」 当時の新聞記事 ワークシート②</p>

	5 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。	・次の時間に発表することを告げる。	振り返りカード
第三時 見方・考え方の深化の段階	<p>1 前時の学習を思い起こす。</p> <p>2 国民が礼次郎を支持せず、軍部を支持した理由とそう考えた根拠を発表する。</p> <p>3 満州事変後の世界の動きと、礼次郎のしたことを知る。</p> <p>総理大臣を辞めた後、礼次郎はどうしたのだろう</p> <p>4 礼次郎の生き方や、これまでの学習を参考にして、戦争にならないようにするためにどうしたらよいか話し合う。</p> <p>今後、どうすれば戦争に向かわずにすむのだろう</p> <p>5 礼次郎が生きていたら今の時代をどう見ている想像する。</p> <p>6 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。</p>	<p>・グループごとに発表させる。</p> <p>・数名の生徒に発表の内容を整理させる。</p> <p>・戦前、戦中と戦争に反対する姿勢を貫いたが、日本は戦争拡大の道を進んでいったことを資料から読み取らせる。</p> <p>・板書したキーワードを参考にして、今後、平和を守るためにはどうすればよいかを、国民の立場で話し合わせる（ホワイトボード）。</p> <p>・グループごとに発表させる。</p> <p>・礼次郎が生きていたら、今の時代をどう見ているだろうと投げかけ、現在に残る礼次郎に縁のある物を提示して、公民の学習につなげる。</p>	<p>*読み物資料「若槻礼次郎の苦悩と平和への願い（二）」ワークシート③</p> <p>嫁が島の写真</p> <p>振り返りカード</p>

4. 福田平治の教材化

① 単元名 「福田平治の生き方から福祉について考えよう」

② 単元の位置づけ

歴史学習の最後に、福祉という視点で歴史を概観し、公民の学習（生存権、社会保障制度）につなげる。

③ 指導計画（3時間構成）

第1時 福田平治はどういう時代に生き、何をしたのだろう

第2時 福田平治の生きた時代と他の時代を比べてみよう

第3時 福田平治の生き方とこれからの時代の福祉について話し合おう

④ 単元目標と展開

単元目標	<p>・写真や視聴覚資料、読み物資料を活用して平治と出合わせ、人物を身近に感じさせて学習への意欲を高める。</p> <p>・平治の生き方や願い、苦悩に共感させながら、なぜ政府は平治を助けなかったのかに疑問をもたせ、当時の世の中を他の時代と比べながら考察させる。</p> <p>・日本の福祉を振り返り、これからの福祉のあり方を話し合わせて、考えを広げたり深めたりさせる。</p>		
過程	学習場面・主な問い	教師の支援と指導上の留意点	資料等（*自作）
第一時 人物	<p>1 写真を見てどんな場面か想像する。</p> <p>2 DVDを視聴して、感想を発表する。</p> <p>3 読み物資料をもとに、平治が育児院を開くと決意した理由を話し合う。</p> <p>平治は、なぜ育児院を始めたのだろう</p> <p>4 平治の業績を整理し、恵まれない子</p>	<p>・福田平治との出会いの場面なので、興味を喚起するような写真を提示する。</p> <p>・平治の生涯の概要と生きた時代の様子をつかませるためにDVDを視聴させる。</p> <p>・ワークシートに自分の考えを書かせ、それをもとにグループで話し合わせる（ホワイトボード）。</p> <p>・子どもの頃の目の見えない老人と少年との出会い、祖母の存在、公的支援の仕組みがないことから、自分がやろうと決意したことに気づかせる。</p>	<p>子ども達と体操する平治の写真</p> <p>DVD「先人の足跡・福田平治」</p> <p>*読み物資料「福田平治の歩んだ道」</p> <p>ワークシート①</p>

<p>との出会いの段階</p>	<p>ども達や困った人を助ける福祉事業やボランティアの先駆けとなったことを知る。</p> <p>平治は、他にどんなことをしたのだろう</p> <p>5 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 読み物資料中の、老人ホームや盲啞学校の設立、歳末慰安運動の実施など、平治が行ったところに線を引かせ、広く社会福祉に努めたことを押さえる。 現在に残っている建物等の写真を提示し、現代とのつながりを印象づける。 	<p>愛隣館、県立松江盲学校の写真 振り返りカード</p>
<p>第二時 背景や仕組みの考察の段階</p>	<p>1 前時の学習を思い起こす。 2 平治が助けを求めたのに、なぜ政府が断ったのか疑問をもち、資料をもとに考える。</p> <p>政府は、なぜ平治を助けなかったのだろう</p> <p>3 政府が福祉に力を入れるようになったのはいつからか、日本の福祉の流れについて振り返り、時代による特色を大まかにつかむ。</p> <p>4 平治が生きた時代はどんな時代か、話し合って発表する。</p> <p>平治が生きた時代は、どんな時代だろう</p> <p>5 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平治の生涯を思い起こし、政府による福祉事業が行われていなかったことに改めて注目させる。 年表から、政府は産業を発展させ、外国との関係において力をつけることを優先したことに気づかせる。 資料中の福祉のイメージグラフを見て、公助、共助、自助のどれを示すか予想させる。 近世までは、仏教やキリスト教などの宗教による慈善活動が福祉の中心で、本格的に公的機関が福祉事業に取り組んだのは戦後であることに気づかせる。 「〇〇な時代」というように大まかな時代のイメージをワークシートに書かせ、それをもとに話し合わせる(ホワイトボード)。 現在の福祉制度の基盤ができたことをつかませる。 	<p>平治と子ども達との写真 *年表「福田平治の生涯と世の中動き」ワークシート②</p> <p>*日本の福祉の年表とイメージグラフ人物カード(聖徳太子、ザビエル、行基) ワークシート②</p> <p>振り返りカード</p>
<p>第三時 見方・考え方の深化の段階</p>	<p>1 前時の学習を振り返り、戦後、社会福祉の仕組みが整っていったことを思い起こす。 2 今の時代は、困った状況になったら、政府からいろいろな援助を受けられることを知る。 3 今の時代に対する平治の気持ちを想像することにより、公助が大きくなって良かった点と現代の問題点を考える。</p> <p>平治が生きていたら、今の時代をどう思うだろう</p> <p>4 これからの福祉のバランスはどうしたらよいか、平治の生き方を思い起こして考え、話し合う。</p> <p>これからの時代の福祉は公助と共助、自助のどれに力を入れるべきだろう</p> <p>5 学習を振り返り、自己評価をカードに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 日本国憲法第25条を読んで、社会福祉や社会保障を国の責務としたことを押さえる。 病気になったら、年をとったら、働けなくなったら、障がいがあったら等具体的に考えさせる。 肯定的な意見を出させた後、問題点を示唆する資料を提示し、揺さぶりをかける。 地域の結びつきの疎遠化や財政王迫など、新しい問題が起こっていることに気づかせる。 黒板に書いた「公助」「共助」「自助」の内、最も力を入れるべきだと思う所に自分の名前を書いたカードを掲示させる。 グループで話し合わせ(ホワイトボード)、グループごとに発表させる。 社会福祉や社会保障について詳しく公民で学ぶことを伝え、公民の学習につながりをもたせる。 	<p>憲法25条条文</p> <p>最近の新聞記事(児童虐待件数増加、財政王迫)</p> <p>*日本の福祉の年表とイメージグラフワークシート③</p> <p>振り返りカード</p>

5. 実践の考察

2人の人物を教材化した授業を、昨年10～11月に松江市内公立中学校の3年生（1組24人、2組24人）対象にそれぞれ実施した。既に6月に歴史の授業を終え、公民の学習を進めている途中に実験的に両単元を組み込んだので、本来の想定される両単元の位置づけとは異なる。

①<史資料の活用>地域に縁のある人物を取り上げた授業は、子どもたちの学習意欲を高めることに有効だった。準備したDVDや写真や紙芝居、新聞記事にも高い関心を示した。一方、読み物資料については課題が残った。子どもにとっては、文章量（文字数）が多くて、魅力的な資料ではなかったということだろう。資料には写真などを添付し、子どもの興味を引きつける工夫もしたが、提示方法（映像化等）や事実確認、話し合い場面での活用の工夫が不十分だったと考える。

②<対象の複線化>若槻の授業では、満州事変から満州国成立へと拡大路線をたどった当時の世の中の事情を、不拡大路線の「礼次郎」と拡大路線支持の「国民」の視点で考察させた。福田の授業では、当時の世の中の状況を、福祉に積極的な「平治」と福祉に消極的な「政府」の態度の違いから考察させた。公民的分野の学習に入って久しく、既習の歴史事象の記憶が薄れていたため、特に通史に位置づけた若槻の授業では難しい面もあったが、多くの子どもは異なる立場や

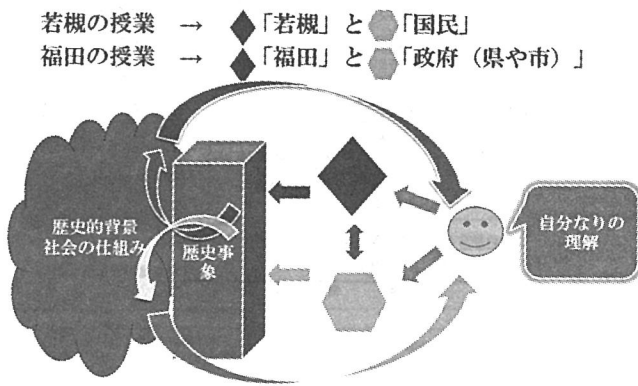


図1 学習対象の複線化と理解の過程

主張のそれぞれの時代背景や仕組みを自分なりに理解することができた。教師が「背景は～です。」「当時の世の中は～でした。」と、説明するやりかただと、子どもは「そうなのか」と認識はする。しかし、それは表面的な知識でしかないだろう。自分で考えて解釈しながら辿り着いた時代背景や世の中の仕組みの理解は、子どもにとって意味あるものになる。

③<「話し合い」の活用>小集団での話し合い場面を毎時間設定し、それぞれの段階での話し合いを深めながら、次第に話し合いのレベルを高めることをねらった。座席の近い子どもで3～4人のグループを作り、社会科の学習班とした。平素の授業では一斉の形態が中心だが、子どもたちは和やかに話し合いを進め、実践後の振り返りでは「話し合いを通して自分の考えを広げたり深めたりできた」の項目について、2つの実践とも約80%の子どもが「できた」と答え、「できなかった」と答えた子どもは若干名だった。ワークシートやホワイトボードの記述、振り返りカードの感想からも話し合いが考えを広げたり深めたりするのに有効だと実感した。話し合いが成立するための基盤は、社会科の授業だけでなく、学校全体の教育活動に位置づけて取り組むことにより高い効果が期待できる。その上で社会科の授業で配慮すべき点を挙げると次の3点だろう。

第1は、話し合いのテーマ設定である。若槻の単元は、本来は終戦の学習終了後に設定し戦後の学習につなげるという位置づけであるが、今回は既に子どもは戦後の学習を終えていたので、「今後、ど

うすれば戦争に向かわずにすむか」というテーマにした。しかし、子どもは、「平和に暮らす」「話し合いで解決する」「核兵器をなくす」など、大切ではあるが切実感のない観念的で抽象的な意見に終始しがちだった。自分のこととして考えさせるには、もっと考えやすい当時の時代状況に即したテーマ設定をする必要があった。

第2は、意見の可視化の手立てである。子どもたちが、頭の中で考えた見えないもの、見えるようにするという表現の工夫が必要である。また、話し合いでは、まず自分の意見を持つことが重要であり、それをもとに友達の意見とすり合わせをしていく。それらの手立てとして右のようなワークシートやホワイトボード、名前カードを活用した。ホワイトボードは他の人に考えを「見せる」ために有効ではあるが、全員の意見を書くことで満足し議論が深まらないグループもあり課題が残った。

第3は、小集団の作り方である。座席の近い子ども同士のグループだったことで、少数意見が生かされない場面があった。福田の授業の第3時で、「自助に力を入れるべき」と答えた子どもが一人いたのだが、班ごとの発表の場では消えてしまったのだ。同じような考えの子どもでグループを作ることも考えるべきだった。その上で意見を戦わせると、少数意見が生かされ議論も深まるだろう。一人の場合は教員と一緒に考えるのも一つの方法である。

6. 授業後に残ったもの

近現代のイメージについて「重要なー重要でない」の4件法で尋ねたところ、歴史学習終了後(6月)と授業後(11月)で大きな変化があった。近現代を「(どちらかと言えば)重要でない」と答えた子どもが大きく減り(13人から2人)、43人(95%)が「(どちらかと言えば)重要」と答えた。

ワークシート①
若槻礼次郎が大切にしたのは、どんなことだろう?
～ 礼次郎の言葉(台本より)から考えてみよう～

ワシントン会議は10対8でした。

ロンドン海軍軍縮会議で(1930年)
○海軍艦(軍艦)の割合を、イギリス、アメリカの10に対して、日本は7を主張したが、なかなか受け入れられなかった時、イギリスの責任でワシントンに赴いて自分は、海軍の軍縮は、世界の平和を維持し、国民の負担を軽減するために、最も大切なことだと感じており、心の底からその実現を希望し、何とかしてこの会議をまとめたこと、盡力を尽くしている。

自分の生命と名誉を犠牲にしても顧みないという覚悟を決め、今日までこの会議に臨んでいたのである。

もし、自分が力を尽くすことによって、何とかまとまりがつかずならば、自分の生命と名誉のごときは、何とも思わない。

○日本の割合を8.975で交渉し、軍縮条約を調印したことに対して反発して怒り、大剣を背にした日本海軍の軍人が帰った後・・・

外に向かって戦うことは、同時に内に向かって戦うことであり、そうであれば、事はまとまらない。

佐江に帰郷した際に、雑貨小で子どもたちにした話(1930年)

私は、この前外国へ行って帰ってきたのですが、外国との話し合いは、大変難しいことで、お互いにくくなって怒り合うことがあっても、お互いに、あの人は相手にならぬというふうなことは、言ったり言われたりしたことはありません。それはアメリカもイギリスも真面目にやっているからであります。真面目にやるとは、相手にならぬということはありません。

ごんごん

民権党の午餐會(昼食會)で(1932年)

臨時(臨時)防衛の光榮は、前敵上の部隊をはたして行わなければならないが、前敵との調和を無視し、國民の負担を顧みないで軍備を拡張すれば、大敵はできるまでもありますが、敵者(あいつ)が大敵をむくようにすれば、軍備は充実するどころか、かえって弱体化する。

上の資料から、私(僕)は、礼次郎が大切にしたのは

国民と平和
3年 組 番 氏名 ()

だと思いました。

ワークシート②

今日の学習のテーマ
「福田平治は、どういう時代に生き何をしたのだろう」

学習の流れ

- 1) DVDを見て、感想を言おう。
平治について、その時代について
あつちーと、福治はいい人だと思ってるよ。
- 2) 平治が有見識を聞くこと決めたのはなぜか、話し合おう。
- 3) 平治の業績を整理しよう。
- 4) 学習の振り返りをしよう。

平治は、なぜ有見識を始めたのだろう。

自分の考え

平治の平治が有見識の人は、あつちーと、福治はいい人だと思ってるよ。あつちーと、福治はいい人だと思ってるよ。あつちーと、福治はいい人だと思ってるよ。

3歳の頃の経験から、親目が笑顔をみせた時に、自分も笑顔で返すようになった。自分も笑顔で返すようになった。自分も笑顔で返すようになった。

参考になった次だちの考え

3年 組 番 氏名 ()

図2 ワークシート(上:若槻①、下:福田②)

それぞれ、わずか3時間の授業ではあったが、多くの子どもに「近現代の歴史は重要なんだ」という意識が強まったことは、今回の教材開発の成果の一つと言えよう。

*自己評価は「できた」「少しできた」「できなかった」など自分の気持ちに合う言葉で書いてください。

*自己評価は「できた」「少しできた」「できなかった」など自分の気持ちに合う言葉で書いてください。

『若槻礼次郎の生き方から戦争と平和について考えよう』
3年(2)組()番氏名()

月日	学習の計画	自己評価	この時間でわかったことや心に残ったこと(感想など)
10/31	若槻礼次郎の業績(栄光)	礼次郎という人物や当時の世の中に興味を持つことができた。 できた。 できた。	礼次郎の業績や戦いの大切さについて考え、自分の利益と利権を争ったことが、今の日本を形作ってきたこと、国を建てた人々の偉業を感じた。
11/1	若槻礼次郎の苦悩	当時の世の中を横断的に理解しようとした。 横断的に理解しようとした。 自分なりの考えを持つことができた。	当時の世の中を横断的に理解しようとした。結果が明らかになった。国を建てた人々の偉業を感じた。自分なりの考えを持つことができた。
11/2	若槻礼次郎の生き方とこれからの社会	これまでの学習を振り返り、自分なりの考えを持つことができた。 振り返り、自分なりの考えを持つことができた。 振り返り、自分なりの考えを持つことができた。	これまでの学習を振り返り、自分なりの考えを持つことができた。若槻礼次郎の時代には平和は本当に尊いものだったのだろうと思う。戦争、震災などで人々の心が不安定になっていた時代に、リーダーとして国を支えた若槻さんの話を聞いて、今の時代不況の不安にある国民には若槻さんのようなリーダーが必要ではないかと思いました。

『福田平治の生き方から福祉について考えよう』
3年(1)組()番氏名()

月日	学習の計画	自己評価	この時間でわかったことや心に残ったこと(感想など)
10/31	福田平治の業績	福田平治という人物や当時の世の中に興味を持つことができた。 福田平治の業績や戦いの大切さについて考え、自分の利益と利権を争ったことが、今の日本を形作ってきたこと、国を建てた人々の偉業を感じた。	福田平治の業績や戦いの大切さについて考え、自分の利益と利権を争ったことが、今の日本を形作ってきたこと、国を建てた人々の偉業を感じた。
11/1	福田平治の生きた時代	当時の世の中や日本の福祉の流れを理解しようとした。 当時の世の中や日本の福祉の流れを理解しようとした。 自分なりの考えを持つことができた。	当時の世の中や日本の福祉の流れを理解しようとした。結果が明らかになった。国を建てた人々の偉業を感じた。自分なりの考えを持つことができた。
11/2	福田平治の生き方とこれからの福祉	これまでの学習を振り返り、自分なりの考えを持つことができた。 振り返り、自分なりの考えを持つことができた。 振り返り、自分なりの考えを持つことができた。	これまでの学習を振り返り、自分なりの考えを持つことができた。若槻礼次郎の時代には平和は本当に尊いものだったのだろうと思う。戦争、震災などで人々の心が不安定になっていた時代に、リーダーとして国を支えた若槻さんの話を聞いて、今の時代不況の不安にある国民には若槻さんのようなリーダーが必要ではないかと思いました。

○3時間の学習を振り返り、若槻礼次郎やその時代について、心に残ったことや感想、意見などを書いてください。
戦争、震災などで人々の心が不安定になっていた時代に、リーダーとして国を支えた若槻さんの話を聞いて、今の時代不況の不安にある国民には若槻さんのようなリーダーが必要ではないかと思いました。

○3時間の学習を振り返り、福田平治やその時代について、心に残ったことや感想、意見などを書いてください。
福田平治の業績や戦いの大切さについて考え、自分の利益と利権を争ったことが、今の日本を形作ってきたこと、国を建てた人々の偉業を感じた。

自分にとって平和が当たり前なのですが、若槻礼次郎さんの時代には、平和は本当に尊いものだったのだろうと思います。大戦を終え、平和が訪れた今だからこそ若槻さんの意思を心にとめ、核や紛争と言った社会的問題に取り組んでいくべきだと思いました。戦争、震災などで人々の心が不安定になっていた時代に、リーダーとして国を支えた若槻さんの話を聞いて、今の時代不況の不安にある国民には若槻さんのようなリーダーが必要ではないかと思いました。

自助、共助、公助はすべて大切だけれど、日本は介護が受けられない人がまだまだたくさんいるので、共助はもっと力を入れていかないといけないかなと思いました。僕は、福田平治の生き方や名前を全く知らなかったけど、学習をしていってだんだん福田平治のことがよくわかってきました。福祉活動には、昔は力を入れていないことを知りとてもびっくりしました。3時間という短い時間だったけど、学んだことをこれからの学習に生かしたいです。

図3 学習の振り返りカード(左:若槻、右:福田)と単元終了後の感想

図3はこの単元で使用した振り返りカードである。このカードの単元終了後の感想を文で分け、KJ法的手法を用いて分析してみたところ、2つの授業の共通点と相違点が浮かび上がった。授業を行ったクラスが異なるので単純な比較はできないが、傾向としてとらえることはできるだろう。

共通しているのは、どちらの授業も「授業が楽しかった」「3時間という短い時間でたくさんの方が学べた」など、授業を楽しみ授業を通して得るものがあったという感想が多く、取り上げた人物に対して好意的な感想が多かったことである。若槻礼次郎や福田平治という平素の授業では学ぶ予定にない「知らなかった」人物を、学習を進めるにつれて、「初めて知った」「知って良かった」「すごい人だ」と、学ぶ価値のある人物としてとらえていった。しかも、人物のことだけでなく当時の時代の理解を深めることもできた。より学習を深めるためには人物に共感するだけでなく批判的に理解するこ

とも大切であるが、3時間の授業では難しい。郷土の人物でもあるので、本研究では共感的に理解することを大事にした。

一方、相違点は、福田の授業感想では時代背景や福祉に対する自分なりの意見の記述が多く、自己の将来の生き方に踏み込んだ子どももいた。それに対して、若槻の授業感想は人物の評価や感想に関わるものが多く、時代背景の考察や自分の意見を記述した子どもは少なかった。若槻の授業はこれまで述べてきたように、実際の授業は通史で扱えなかったことや、話し合いのテーマ設定に問題があったこともその一因と考えることができるだろう。また、政治と福祉と活躍した世界の違いもあるだろうが、人物がどのくらい子どもにとって「身近」だったか、ということに因るのではないかと考える。

Ⅲ 「身近」とは何か

地域に縁のある人物を取り上げた理由は、まずもって、子どもが人物を身近に感じることで学習意欲の向上が期待できるからである。若槻礼次郎は松江出身であるが、成人してからは地域を離れ中央政界で活躍した。郷土出身の総理大臣として、学習に臨んだ子どもたちは名前を知っている程度の存在だった。一方、福田平治は鳥取出身だが、松江に移住し松江で福祉事業を行った。子どもたちは名前も知らない存在だった。

この二人のうち、どちらが子どもにとって「身近」だったのだろうか。第1時では子どもはそれぞれの人物に同じように興味をもち、気持ちの上で近づくことができたと考えてよいだろう。それは二人が地域に縁があるからなのは確かだ。しかし、第2時から第3時に進むにつれ、子どもたちと礼次郎との距離は徐々に離れていき、子どもたちと平治との距離は徐々に近づいたようだった。それは、平治の生涯が子どもの生活実態に結びついていなかったからではないだろうか。子どもは福祉について学びボランティア活動も行っている。家族が福祉制度を利用している子どももいるだろう。平治が生きた足跡として残る建物（愛隣館）を今の時代に見ることもできる。

人物が地域に縁があることは、時間を超えて同じ空間に生活していたことから親しみを生じさせる。だが、社会科の授業で教材として活用するには、それだけでは「身近」とは言えない。教材を本当に身近に感じるのは、子どもの経験や生活との関わりがあり、自分のこととして共感的にとらえることが可能な場合である。

福田の場合は、準備した資料から、人生のテーマともいえる福祉への関わりを少年期の原体験（目が見えない老人との出会い）として読み取ることができる。また、信心篤い祖母が慈善活動を行っていた影響や、松江水害で被災した浮浪孤児たちの状況に心痛め、救済を考えるなど、子どもたちが共感・追体験しやすい具体的状況を示す資料が残されている。

若槻の場合には、提示した資料からは、目覚ましい努力による立身出世の姿は見えても、穏健外交や平和的な政治的志向の原点ともなる礼次郎の心的状況は見えて来ない。国民の生活を犠牲にした軍拡によって「骸骨が大砲を引っ張っても仕方がない」状況を避けたいという、礼次郎の信念を具体的に理解し共感・追体験することが課題となるが、そのための学習課題の設定や資料の準備が困難であった。このことが、若槻の学習で授業後の感想が人物に関わる道徳的な評価が多く、時代背景の考察や自分の意見を記述した子どもが少ない理由であろう。

IV 授業の改善方略

福田平治の授業については、中学3年生という発達段階にも合致し、概ねこのままで良いと考える。単元の位置づけも、図4のように歴史学習の最後に設定すれば、福祉という視点で既習の歴史学習を振り返り学び直すとともに、公民の学習につなぐのに有効であることが明らかになった。歴史学習と公民学習が分離している印象をもつ子どもが多いが、本来はそうではない。福田平治の授業はその意味でも意義があるだろう。この授業を行う際に最も注意しなければならないのは、道徳の授業にならないようにすることである。私財を投げ打って人々の幸せのために尽力した人物であるため、道徳的にも尊敬に値する。しかし、それだけに終始しては社会科とはならない。当時の社会の仕組みをしっかりと押さえた上で、福田の行為の社会的意味を考えさせることが重要である。

次に若槻礼次郎の授業だが、当時の社会状況がつかみやすいように通史の中で扱うことが重要だろう。その場合、図5の第1パターンのように、終戦の学習の後に単元を設定し、近代を振り返るとともに戦後学習につなげその先の公民の学習にも関連づけることも可能である。これまでの歴史学習では、戦前と戦後で流れが途絶えてしまうような感じがあった。そこで、終戦の学習後に若槻の学習を通して近代を学び直し、戦後学習につなげるのは意味がある。しかし、話し合うテーマを子どもがもっと考えやすいように設定する必要がある。例えば、「若槻礼次郎のしたことは無駄だったのだろうか」と社会的意味を問

い、「無駄だった」「無駄ではなかった」のどちらかを選択させて議論させるとよい。その際に、子どもたちの名前カードを黒板に掲示させて可視化すれば、クラス全体で問題を共有し議論を深めることができる。さらに議論する中で、自然に戦争や平和についての考えることにもなるだろう。

図5の第2パターンは、単元の位置づけと組み方を大幅に変えた例である。満州事変勃発の学習の際に、若槻という人物と出合わせ、その思いを考えさせる。そして「十五年戦争」終戦の学習時に、戦中戦後の若槻の考えや行動を知らせて、戦後の民主主義や平和主義の学習につなげるという案である。敗戦の焼け跡から民主主義国家として生まれ変わり急速に復興が進んだ日本であるが、それは平和を希求し様々な努力をした人たちの存在があったからできたことだろう。その原点の一人として若槻の生き方を取り上げる方法もあると考える。

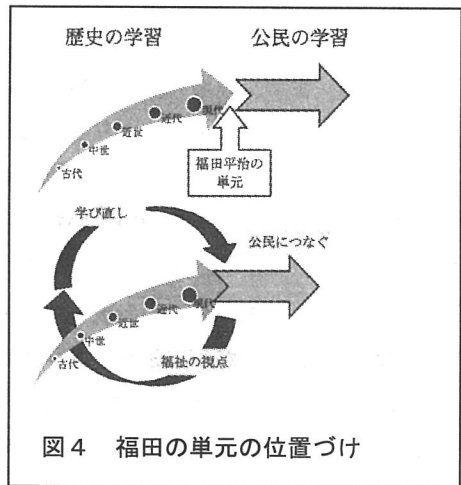


図4 福田の単元の位置づけ

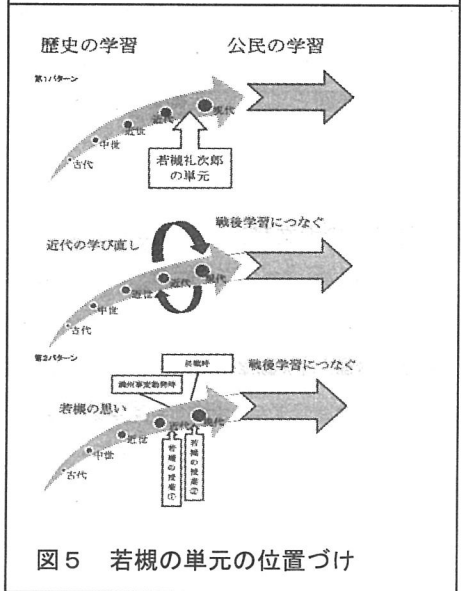


図5 若槻の単元の位置づけ

V おわりに

本研究の目的は、地域に縁のある人物を教材化して近現代の歴史学習に取り入れることにより、子どもの学習意欲を高めるとともに、歴史的背景や社会の仕組みを考察し合う授業の教材を開発することにあった。まず、地域の人物を取り上げ学習対象とすることで、興味・関心が薄れがちな近現代史学習が、子どもたちにとってより身近なものとして、学習意欲を高めることができた。自分たちから「遠い存在」として意識していた近現代の歴史が、自分たちの地域でも、自分たちの関わりのある身近な人々を巻き込みながら動いていたことを実感することで、生き生きとした学習対象となりえたのである。本多公栄が40年前に『ぼくらの太平洋戦争』で、子どもたちの父母や祖父母の戦争体験を聞き取り調査から掘り起こし、被害体験のみならず加害体験まで探究することで太平洋戦争の本質に迫る実践を公表したが⁵⁾、近現代史学習においては、歴史をいかに「身近」に自己の関わりでとらえさせるかが鍵となることを、改めて認識させられた。

さらに、2つの授業実践の比較から「身近」の条件を再考し、人物が地域出身であるということよりも、人物の「生き方」が子どもの生活課題や経験と関わりがあること、共感・追体験する具体的な自己決定場面に出会わせることで、より学習意欲を高めることが明らかになった。

今後の課題として、若槻の教材開発を、図5第1パターンと第2パターンに即して再構築していきたい。

<引用・参考文献>

- 1) 若槻禮次郎 『明治・大正・昭和 政界秘史—古風庵回顧録—』 講談社学術文庫 1983 他
- 2) 福田平治 『山陰社会事業の父 福田平治翁自伝』 福田平治翁自伝刊行会 1992 他
- 3) 藤岡信勝 「『人物学習』を見直す」(上)(下)『現代社会』11、12 学事出版1982-1983、「科学的社会認識の形成と社会科の授業—『安井実践』をふまえて—」大槻健・臼井嘉一編『中学校社会科の新展開』あゆみ出版 1983 (これらの文献は 藤岡信勝『社会認識教育論』日本書籍 1991 に採録されている。)
- 4) 森本直人 「「理解」理論による主体的な歴史解釈力の育成」『社会科研究』第48号 全国社会科教育学会 1998、森本直人 「社会科における理解」社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書 1994、藤瀬泰司 「社会科における理解」社会認識教育学会編『新社会科教育学ハンドブック』明治図書 2012
- 5) 本多公栄 『ぼくらの太平洋戦争』 鳩の森書房 1973